



◇

心、とは何であるか。

古来より多くの賢者、覚者が呻吟し、今尚答えの出ない人類の永遠の命題である。

ある者はそれを神の祝福の証といい、ある者は人と獣を分かち境界であると説く。心とは魂そのものであると誰かが言えば、そんなオカルティックなものではない、もっと普遍的な人間の徳性の表れだと異を唱える者が出る。

かくして百花繚乱の議論は、確たる結論のひとつも出せぬまま現在まで続けられてきた。

最新の大脳生理学は、心が莫大な量の神経細胞網、ニューラルネットワークにより構築された高度な情報処理系の、幾つかの領域に分かれて相互に監視・干渉・補助を行う過程で生じた脳内システムの錯覚…『我思う 故に我あり』という有名な言葉を借りるならば、『我を我と認識する我は 既に我とは別の我である』とでも言い表す事が出来る…である可能性を示唆している。

肉体と脳を切り離して考えられないように、脳もまた肉体の存在を前提としなければ、その能力について説明する事は出来ない。そういう意味では、例え靈魂というものが未知の形で死後、存在するものであったとしても、肉体という自在に動くセンサー群を喪っている時点で、それは既に人間とは違うものであると言えるであろう。

極めて乱暴かつ簡単に心というものを定義するなら、それは数多くの神経細胞の発する信号の無限に近い組み合わせと言う事が出来る。

人が決して他者そのものになれないのは、一つには肉体の性能に個体差があり過ぎるという点があげられるが、生物学的に互換性があり又、通信手段は必ずしもテレパシーなどという未知の能力を必要とせず、互いの感覚器に情報を与えあえば事足りるので大きな障害にはならない。

(顔をしかめ、それを見るといった行為は立派な通信の一形態である)

問題は、互いの持つ莫大な各種信号に同期する事が事実上不可能であるという点にある。

殉のサイコインという能力にしても、同期出来る相手の情報、信号量は全体のほんの僅かにしか過ぎず、ただそれが常人より多いというだけに過ぎないのだ。

今、彼は加夏子という情報の一端に自分のそれを重ね、別の情報群にアクセスしようとしていた。

だがそれは、彼を頑なに拒むものであったのだ。

◇

ここまではうまくいっているようだ、そう思う殉の意識は、既に光球ではなく人の形をしていた。  
更に下へと目を凝らす。

見えてきた。

黒いだけだった闇に濃淡が生じていた。

変化の兆候だ。

『扉』への微かな期待を胸に、殉は頭を下げ、スカイダイビングの急降下のような姿勢をとった。  
グンと勢いがついた、次の瞬間。

避ける間もなく突っ込んだ。

生暖かい灰色がかかった極彩色が巨大なブロボとなって吹き上げてきた。目眩がする程の猛烈な悪臭と全身を覆う不快なドロドロに押し流され、もみくちゃにされ、猛烈な勢いで遥か上方に吹き飛ばされそうになる。気持ちの悪い未消化物のようなものが穴という穴から入り込んできた。

抗いたくても、しがみつく物も踏ん張る足場も無い。ここはイメージの世界なのだ。

イメージの世界

そうか

「逃げないぞ！ ぜったいに！！」

強く念じて四肢を張り顔を上げた。

眼球の表面にまでヌルリと流れる粘液の気味悪さに吐きそうになりながら、やっぱり見えるという事はイイことないんだなぁと場違いな想いを抱いてみる。

奔流がふいに消えた。

漆黒の空間に、再び一人ぼっちで取り残された殉は、手足の緊張を解いて辺りを見回してみた。

ふと背後に気配を感じて振り返った殉は、喉の奥から心臓が飛び出そうになった。

…目、だ…

全てを覆い尽くすかのような目、いや目玉が彼を見下ろしていた。

巨大な虹彩が彼に向かって引き窄められる。血走った、敵意に満ちた目。

全身に立った鳥肌が皮膚を突き破って飛び散りそうになる。

びりびり、ばりばりばり

音を立てて巨大な目玉が真ん中から裂けてゆく。

ぱっくりとあいた。

ズラリと並んだ、出鱈目に生えた牙

おうわああああああああああ～！！！！

頭の皮がめくり上がる程口を開け殉は絶叫した。

◇

突然、のけぞるようにベッドへ倒れ滅茶苦茶に軀をよじり始めた殉を見た恒彦は、慌てて彼の両腕を掴み押さえつけようとした。

もの凄い力でベッドから跳ね上がろうとする殉に覆い被さりながら叫ぶ。

「サキ！病院に電話しろ！今すぐっ！！」

紗季子が駆け出そうとして止まる。

「あなた…」

加夏子が、うっすらと笑っていた。

薄暗く笑いを浮かべている加夏子を見た紗季子は、階下へ向いかけた足を止めた。

「どうした?! 早く病院へ電話を!!」

「だめよ…あなた…だってこれじゃ…」

棒のように立ちつくしながら、紗季子は加夏子が目覚めたあの日の事を思い出していた。

アイツ、ヤッツケタ

焦点の定まらない目で虚空を睨みながら、加夏子は今と同じ笑みを浮かべ、そう一言呟いたのだ。

あの時と同じだ

ここで止めたら、加夏子は今までと何も変わらない

何一つよくなんかなりはしない

躊躇いがちにベットの方へ向きを変えると、紗季子は跳ね回る殉と恒彦の身体の上に覆い被さった。

夢中で夫のシャツの端を掴んでしがみつく。

「何やってんだバカ! いいから電話しろ!」

「駄目なの! 彼じゃなきゃ駄目なのよ! ここで駄目ならこの先いつまで経ってもカナはダメなままなの!! 今しかないのよ!!!」

親子亀のロデオよろしく上下左右に揺さぶられながら、それでも紗季子は恒彦の背から落ちなかった。

カナちゃん!

カナちゃん!!

カナちゃあああーん!!!

愛娘の名を必死になって連呼する。

殉を抑えつける手を離すに離せず、紗季子を背中から降ろす事も出来ない恒彦も、いつしか彼女と一緒に娘の名を叫んでいた。

加夏子っ!

かなこおおー!!

…少しずつ、少しずつ殉の動きが収まってくる。

やがて静かになった。

「どうにか収まったようだ、な」

「ええ」

肩で息をしながら、恒彦は紗季子を背から降ろした。

グチャグチャに乱れた髪をうなじに押さえつけ、紗季子は殉を見下ろした。

彼の顔からは苦悶の表情が消え、口元には微かに笑みさえ浮かんでいた。

すうっと両手が持ち上がり、宙に向かって差し出される。

加夏子の方へ向き直ると、今度は逆に彼女の額に深い皺が走っていた。  
イヤイヤをするように首を左右に振る。

「なにが…起こっているのかしら」

「俺も知りたいよ」

何か飲み物を持ってきましょうと言い、紗季子は一階へ降りるとバッグから携帯電話を取り出し、病院の番号をプッシュした。

「もしもし、夜分にすみません。その、娘の事で至急、連絡をとりたい人がいるんです。ええ。お願いします」

名前を告げると、紗季子は電話を切った。